

〔研究ノート〕

W. ムアワッドの戯曲にみる トランスナショナルな戦禍の記憶

真 田 桂 子

はじめに

ワジディ・ムアワッド (Wajdi Mouawad, 1968-) は、フランスやケベックを中心に活躍する現代フランス語圏において最も注目をあびている劇作家・演出家の一人である。1968年にレバノンの首都ベイルートで生まれ、1975年に勃発したレバノン内戦を逃れ、8歳の時、家族とともにフランスへと亡命する。その後フランスでの滞在の更新がかなわず、1983年にはカナダ・ケベック州へと移住する。

ムアワッドは1991年にカナダ国立演劇学校を卒業した後、劇団を主宰し、シェイクスピアやセリヌの作品を翻訳し演出、上演する。一方、自ら戯曲を創り精力的に発表していく。ムアワッドの作品にはいずれも故郷のレバノン内戦の影が色濃く宿っており、現代世界の喫緊の課題である絶えることのない戦禍とそこに生きる人間の条件を、救いのなさやユーモアが入り混じり、重厚さに一抹の希望が瞬く世界のなかに描きだし、現代の叙事詩劇とも称される独特の雰囲気をもつ不条理劇へと昇華している。

観客を独自の世界へと引き込むムアワッドの作品は、若い世代からも熱烈な支持を得て世界各地で上演され高い評価を得ている。また世界各地の劇場の監督やディレクターを務め、2007年にはR. ルパージュらの後を継ぎ、オタワのカナダ国立芸術センター・フランス語劇場の芸術監督に就任している。数々の賞も受賞し、1998年には『トイレにこもったウィリー・プロタゴラス』(*Willy Protagoras enrôlé dans les toilettes*)で、ケベック演劇批評家連盟最優秀作品賞を、2000年には『沿岸』(*Littoral*)でカナダ総督文学賞(演劇部門)を受賞する。2002年にはそれまでのすべての作品に対してフランス芸術文化勲章シュヴァリエが授与される。また2009年にはアカデミー・フランセーズ演劇大賞を受賞して、ムアワッドの代表作である『約束の血』(*Le Sang des promesses*)四部作が、世界で最も権威ある演劇祭であるアヴィニョン国際演劇祭で10時間近くにわたって上演された。

ここではムアワッドの『沿岸』『炎：焼け焦げる魂』(*Incendies*)『森』(*Forêts*)『空』(*Ciels*)からなる『約束の血』四部作のうち、1997年に発表された『沿岸』および2003年に発表された『炎：焼け焦げる魂』を取り上げて検証する。一方、ムアワッドは『約束の血』四部作と称される作品について、自らの歩みとともに作品の成立にいたるまでの経緯や様々な創作秘話をふり返り、『約束の血—パズル、根茎、リゾーム』(*Le Sang des promesses, Puzzle, racines, et rhizomes*)というエッセイに書き記している。この作家自身の創作に関する貴重な証言を手掛かりに、苛烈なまでの不条理と痛切さが混在する特異な物語の源泉に迫り、ムアワッドの作品が孕むいくつかの特徴について考察したい。とりわけ、戦禍や難民をテーマとするこれらの作品が越境の地カナダで生み出された背景やその必然性についても検証し、作品が孕むトランスナショナルな特徴についても明らかにしたい。

I レバノン：離脱と帰郷

ムアウッドの作品に言及する前に、作家自身の故郷であり、作品に大きな影響を及ぼしているレバノンの状況について概観する必要があるだろう。

中東のシリアとイスラエルに隣接し地中海沿岸に面するレバノンは、歴史的にキリスト教マロン派とイスラム教ドゥルーズ派の異教徒が共存している地域であった。第一次世界大戦後はフランスの委任統治領となり経済的にも繁栄し、首都ベイルートは中東のパリと呼ばれた。1941年に独立するが、PLO（パレスチナ解放機構）の台頭により、その多くはイスラム教スンニ派であったパレスチナ難民が大量に流入し、それまでの宗教宗派のバランスが大きく崩れる。とりわけイスラム教徒の急増を懼れたキリスト教マロン派は難民を追放しようとした。キリスト教右派、イスラム教左派両勢力は外国からの後ろ盾をもとに政治的優位を競い合い、関係は急速に悪化していく。そして1975年、ベイルート郊外で一触即発であった両勢力が衝突し、その後15年近くにわたって続くことになる不毛の内戦へと踏み出していく。

隣国のシリアやイスラエル、武器を供給し各派に分かれて軍事援助を行ったロシアや欧米各国の思惑が入り乱れ、レバノン内戦は第5次中東戦争とも呼ばれた。ホテルが立ち並び美しく繁栄していた街は銃撃と砲弾で荒果て、住民たちは敵対する宗派のグループに捕えられ、剥奪され、拷問され、殺害された。昨日まで隣り合って住んでいた住民同士が殺し合い、親兄弟も引き裂かれ、敵対し合い、出口の見えない内戦はますます泥沼化していった。

そんな祖国から家族と共に異郷の地へと亡命したムアウッドは、四半世紀ぶりに故郷の土を踏むことになる。カナダ芸術文化振興協会からの援助で、故郷レバノンに帰還するチャンスを得たとき、ムアウッドは、この経験を糧として「亡命について決して言及せずに、亡命について表現したいと思った」¹⁾と述べている。すなわち帰郷の目的は何よりも創作そのものと密接に結びついていた。しかし実際に生まれ育ったベイルートに赴き、25年間会わずにいた親戚や知人に会い、彼の地の現実に触れたとき、

そこには決して忘れることのなかった故郷の匂いがあった。しかし、パリでもモンリオールでも感じる事がなかったような孤独を、今までの人生でどこにいたときよりもよそ者であるような感覚に襲われた²⁾。

と述べている。そしてその旅の本質的な意味が、作家が当初企図したような劇作のための「芸術的な意味合い」をもつものではなく、自らの奥深くに「突き動かされるような、制御不能な何か」³⁾をもたらすものであったと述懐している。こうしてムアウッドは自分自身に問いかける。

モンリオールにいるとき、レバノンが現実味を帯びた場所とは思えなかったが、今こうしてレバノンの地に降り立ったとき、モンリオールが現実味を帯びた場所とは思えなくなった。(果たして自分は、本当にレバノンを離れていたのだろうか?)⁴⁾

こうした述懐に見られるように、レバノンへの旅は、作家にとって、自分の内奥をえぐられるような、眠っていたもう一人の自分自身に向き合うことを余儀なくさせるオデュッセイア(故郷帰還の苦難の物語)⁵⁾に他ならなかったのではないだろうか。

Mar. 2016

W. ムアウッドの戯曲にみるトランスナショナルな戦禍の記憶

Ⅱ 『沿岸：頼むから静かに死んでくれ』：戦禍をめぐる死者と幻影との対話

『沿岸』は、この故郷への帰還の後、1997年に創作され初演された作品である。この作品は、1997年にモントリオールでのアメリカ大陸演劇祭で初演され、1998年にはフランスのリモージュにある国立演劇センター・ユニオンで初演される。そして2000年にはこの作品によって、カナダで最も権威ある文学賞であるカナダ総督文学賞を受賞している。2009年アヴィニョン演劇祭での、『沿岸』を含むムアウッドの『約束の血』四部作の上演は、若者たちを中心とする聴衆に熱狂的に迎えられたという。また日本でも、2010年に『頼むから静かに死んでくれ』というタイトルの戯曲として静岡芸術劇場で上演され⁶⁾、その際の上演に合わせ作品の邦訳も出版されている。

『沿岸、頼むから静かに死んでくれ』⁷⁾は、不条理とユーモア、荒唐無稽なイマジネーションとシリアスな現実が縦横無尽に入り混じり、エネルギーにほとばしる戯曲である。

カナダ・ケベック州のある都会に住むウィルフレッドにある日突然、父の訃報が届く。行きずりの若い女の子との情事の、最高にイケてる瞬間に「リーン・モシモシ・キテクダサイ・アナタノオトウサンガシニマシタ」と、長く音信不通であった父の死を知らせる電話がかかってくる。こうして、ウィルフレッドは死体安置所で父親の亡骸と再会し、そこに現れた親族たちから自らの出生にまつわる複雑な事情についても聞き及ぶ。父親の亡骸を生まれ故郷である中東の沿岸にある街に連れて行き、母親の遺骨とともに埋葬してやりたいと願ったウィルフレッドは、「話をする」父親の亡骸を伴い、また幼い頃から想像力の中に住む唯一無二の親友のアーサー王の家来である「騎士ギイロムラン」に護られて、彼らと奇想天外な対話を繰り返しながら、彼方の地である沿岸の街へと向かう。

死んだ父との会話から、たとえ彼の地が戦禍と不幸に満ちていても、父の幸せは母と共に暮らした祖国の地にしかないと確信したウィルフレッドは、生まれ故郷の街に父を葬るための墓地を探す。しかし、だんだんと戦禍に荒れ果てた街とそこに生きる人々の悲惨な現実が明らかになってくる。

ウィルフレッド：父さんが三日前に死んだ。生まれた村に葬ることで、人生に折り合いをつけに来たんだ。

ワザワン：重い使命を背負ったもんだ！もっと重たくなるかもしれない。五日前に、サイドという若者が死んだ。埋葬するために、死者の棺桶を開け、死者とともに死者を葬るしかない。

ウィルフレッド：どうして！

ワザワン：場所がもうないからじゃ⁸⁾。

旅の途中で出会うのは、様々な傷を背負いながら戦禍の中で生き延びた奇妙な人々。ここでは皆が旅立つ。しかし何のため？ 歌う女のシモースが応える。

シモース：何が起こったか知るため！あんたは知りたくない？誰が誰を殺したか？誰が誰を撃ったか？いつ、何人？どうやって？どんなふうに殴って、なぜ、のどを切り裂いたか？なぜ男たちは泣いたのか？(…)どうして彼らは父さんを殺した？(…)母さんはどんなふうに吊るされた？兄さんはどんなふうに犬や鳥たちのえさとして投げ捨てられた？姉さんは何回強姦された？そして焼かれた？そして、サイドは、どうやって爆死した？そうじゃない？知りたくない？さあ！話して！⁹⁾

言葉を失うような苛烈なまでの悲惨な現実の数々。しかし戦禍のなかの混乱が生み出す究極の悲劇とは、肉親同士も引き裂かれ、互いを見失って殺し合ってしまうことではないのか。

アメ：だって、俺が殺したんだ！（静寂）そう、俺が殺した。おやじを。闇の中で殺した。（静寂）¹⁰⁾

そして最後に残るのは、生きた痕跡としての名前だけ。姿を消してしまった人々の名前が記された分厚い電話帳だけが残っていく。

アメ：二十五年前の電話帳なんて、何の役に立つというの？

ジョセフィーヌ：名前が何の役に立って？名前よ！全部の名前！ほとんどの人は何処へ行ったか、死んだか、どこにいるか分からない！叫び、痛み、悲しみ！灰と名前しか残っていない。石碑が何の役に立つ？記念碑は？この国には、名前を刻む石碑も記念碑もない！生者と死者が共にいる！ほら、これがたった一つの記念碑！この国の人がみんな、電話番号と静かに眠っている。（…）¹¹⁾

父の亡骸を葬る場所を求め戦禍の街を歩き回り、傷ついた人々が語る救いのない悲惨さをくぐり抜け、ウィルフレッドは海を臨む沿岸へとたどり着く。そこで彼は父の体を洗い海に葬る。海がすべてを受けとめ、波によって洗い清められ、父はようやく心の安らぎを見出す。

父親：魂は安心を得た。（…）奥底の大いなる静けさに戻って行く。

祖国の人々の名前を遊びの相手とする。魚に混ざって、群れの守り人となる。

（…）

怒れ、激怒しろ！道の果てに、街の果てに、国の果てに、喜びの果て、時間の果てに！愛と苦痛のすぐ後に、喜びと涙、喪失と叫び、

沿岸があり、大きな海がある、

大きな海、すべてを運び去る

俺をどこかへ運び去る。

運び去る 運び去る 運び去る（…）¹²⁾

こうして父と息子の故郷をめざしたオデュッセイアは終わりを迎える。この戯曲が訴えたいことは、おそらく戦禍に苦しむ苛烈で悲惨な現実を浮き彫りにすることだけではないであろう。戯曲の語りや仕掛けが喚起するのは、その現実に向き合うことの困難であり、一方でその現実から逃れることができないという二重の困難である。すなわちここで描き出されているのは、ムアワッド自身がエッセイで述べているように、幼年の頃に戦禍の故郷を離れたにもかかわらず、決して離れることが出来ないという困難を生きるなかで、どうしても果たさざるをえなかった故郷への痛切な帰還の物語であり、横断的なトランスナショナルな視点から描かれた戦禍の記憶の物語ではないだろうか。

Ⅲ 『炎：焼け焦げる魂』：戦禍が生み出した壮絶な魂の叙事詩

『約束の血』4部作の2作目にあたる『炎：焼け焦げる魂』は、ムアワッドが戦禍の記憶に真正面から

Mar. 2016

W. ムアワッドの戯曲にみるトランスナショナルな戦禍の記憶

向き合おうとした壮絶な魂の叙事詩劇である。この作品では、『沿岸：頼むから静かに死んでくれ』において見られたユーモアや諧謔はすっかり鳴りをひそめ、戦禍が生み出した過酷な現実とそれをめぐる痛ましくも荘厳な物語が、不思議なプロットのもとに描き出される。

この作品は2003年に創作されて初演され、日本でも2014年、シアタートラムで上演されている。また、この作品は2010年に、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督・脚本によって『灼熱の魂(邦題)』として映画化された。映画は、2011年ヴェネチア国際映画祭、トロント国際映画祭、カナダ・ジニー賞など内外の国際映画祭で数々の賞を受賞し、アカデミー賞にもノミネートされるなど高い評価を得た。映画はムアワッドの戯曲を原作としてほぼ忠実に再現しながらも、いくつか独自の脚色がほどこされている¹³⁾。

戯曲による物語は37の場面からなり、はっきりとは明示されないが、作家の故郷である中東レバノンに彷彿とする地域とカナダ・ケベック州の都市、モントリオールと思われる場所とが交錯する形で進展する。

戦禍の中東の祖国を逃れて、カナダに暮らしていた女主人公のナワルは成人した男女の双子、ジャンヌとシモンを残して他界する。物語は、公証人が双子を呼び出し、母親ナワルが彼らに遺した奇妙な遺言について告げる場面から幕を上げる。

わが亡骸を裸のままに、棺には入れず、顔を下に向け、墓穴の底に横たえよ。祈りはせず、別れのしるしに、バケツの水をわが亡骸に浴びせ、土をかぶせて墓穴を封じよ¹⁴⁾

奇妙な遺言は続けて、二通の手紙とともに、姉のジャンヌには戦乱の故郷で行方不明となってしまった双子の父親を、弟のシモンには双子の兄を探しだし、それぞれに手紙を渡すよう命じる。それが成就されると、二人の姉弟にも手紙が届くだろう。その時はじめて「私の墓に墓石を置き、輝く太陽のもとで碑銘を刻んでほしい¹⁵⁾」と遺言は締めくくられていた。

こうして双子の姉弟は、亡くなったと信じこまされていた父とそれまで存在すら知らされていなかった兄を探すために、亡き母の故郷である中東の村へと向かう。それはすなわち、亡き母の壮絶な人生の軌跡をたどる旅に他ならなかった。

母の故郷の村人たちの証言から、痛ましい母の過去が浮かび上がってくる。戦禍に明け暮れる彼の地で、敵と味方が複雑に錯綜するなか、母ナワルは15才で敵陣営の若者ワハブと恋に落ち、その許されざる相手の子供を身ごもる。ナワルはひっそりと男の子を産みおとすが、恋人を殺され、生まれたばかりの子供からは引き離される。そしてその日から、必ず見つけると心に誓い、何処とは知れぬ孤児院に預けられてしまったわが子を、ひたすら探し続けるナワルの苦難の日々が始まった。ナワルは風のうわさを聞きつけ、国の南へと下る。しかし息子が預けられていたはずのクファール・レイヤットの孤児院にたどりついたとき、時すでに遅く、子供たちは敵対する武装勢力同志の争いに巻き込まれ連れ去られたあとだった。

ジャンヌとシモンは、証言者を探し出し、困難を極めた母の人生の軌跡をあぶりだす。母ナワルは、生き別れになった息子を探す旅の途中で、内戦の混乱に巻き込まれ、旅の連れであった友人のサウダとともに、兵士を殺したかどで、クファール・レイヤットの監獄に収監されてしまう。その監獄で、ナワルは囚人番号72番の「歌う女」と呼ばれていた。ナワルは友人のサウダから、どんな困難な状況においても尊厳を失わず生きる勇気を見出すために「歌う」ことを教えられる。その監獄には、アブー・タレックという名うての拷問人がいて、ナワルは彼から性的暴力を受けていた。そしてついに、ナワルは拷問人

アブー・タレックの子供を身ごもってしまい、双子を出産する。その後、ナワルはこの産み落とした双子とともに戦禍の故郷を離れカナダへと亡命したのであり、この双子こそジャンヌとシモンに他ならなかった。一方、兄を探し出そうとしていたシモンは、母と生き別れた兄がニハッドという名で、孤児院から武装勢力に連れ去られた後、過激な戦闘員となっていたことを知る。そして、ニハッドの消息を知る土地の有力者チャムセディーンの間から恐るべき真実が知らされる。すなわち、双子の兄のニハッドは名前を変え、クファール・レイヤットの監獄に送り込まれていたというのである。ここで、 $1 + 1$ が 1 となるありえない数式のように、驚愕すべき事実が明らかになる。ニハッドとはアブー・タレックのことであり、双子にとっての兄と父とは他ならぬ同一人物であった。

アブー・タレックはナワルと同様、戦禍の中東を離れカナダに亡命するが、戦争犯罪者として捕えられ裁判にかけられる。そこで彼は、刑務所で拷問した「歌う女」から、人間の尊厳を守り抜くことの大切さを学んだと証言する。ナワルは自分を苦しめたアブー・タレックこそが自らが探し求めていた息子ニハッドに他ならなかったことを知る。ナワルはこうして、亡くなる直前、双子の父としてのアブー・タレックに宛てた手紙と双子の兄としてのニハッドに宛てた手紙とをそれぞれしたためる。そしてそれらをジャンヌとシモンに託し、真実を探りあててを命じる。

ジャンヌがアブー・タレックに手渡した「父に宛てた手紙」では、ナワルは真実を直視するよう訴えかける。

(…)

私たちの子供たちが、今、あなたの目の前にいる。

(…)

この二人こそ恐怖のさなかから生まれた、拷問人の息子と娘
二人を見つめなさい。

あなたという存在を目の前にして、真実によって燃え上がり
焼け焦げる魂を

あなたに手紙を手渡したのは紛れもないあなたの娘

間もなく、あなたは黙るでしょう

私は知っています

真実を前にして、誰もが沈黙に沈むことを

歌う女、あなたの娼婦、クファール・レイヤット刑務所 囚人72号¹⁶⁾

一方、シモンが手渡した「息子に宛てた手紙」では、思い続けた息子への溢れんばかりの思いがつつられていた。

私はあなたをずっと探し続けていたのよ。

いたるところを

(…)

今、あなたの前にいるジャンヌとシモン

二人はあなたの弟と妹

あなたは愛から生まれたのだから

Mar. 2016

W. ムアワッドの戯曲にみるトランスナショナルな戦禍の記憶

二人も愛でむすばれた弟と妹

(…)

この手紙で、歌う女があなたの母親だと分かったら

あなたはきっと黙ってしまうでしょう

辛抱強く待ちましょう

私は拷問人ではなく、息子に向かって語りかけているのよ。

辛抱強く待ちましょう

沈黙の向こうに

ともにあることの幸福が訪れることでしょう

ともにあることほど美しいことはないわ

これが、あなたの父さんの最後の言葉よ

あなたの母より¹⁷⁾

そして、シモンとジャンヌの双子に宛てた手紙のなかで、ナワルは耐え難い事実の、長い沈黙の裏に隠されていた真実を、今、まさに光明が瞬くように現れた真実を、泣く子をあやすように語りかける。

シモン、泣いているの？

もし泣いているなら、涙をぬぐう必要はないのよ

私も涙をぬぐいはしないわ。

幼年の記憶とは、まるで喉に突き刺さったナイフのよう

(…)

今、まさに、物語を一つに結びつけるときがきたのよ。

物語は粉々に砕けているから、

そっと、ひとつひとつをすくいあげ、

そっと、ひとつひとつの思い出をよみがえらせて

そっと、ひとつひとつを揺さぶって生き返らせるの。

(…)

ジャンヌ、

あなたの出生の物語とは、あなたは恐怖のなかから生まれたのよ

あなたの父親の出生とは、

大いなる愛の物語にはじまる

しかしもっとさかのぼるなら、

愛の物語の源に、血とレイプがあったかもしれない

しかしまた、残虐非道なレイプ犯の出生の源には

愛の物語があったかもしれない

(…)

どうしてあなたたちに真実を告げなかったかと？

見出されることによってしか、明らかにならない真実があるのよ

あなたたちは封を開け、ついに沈黙は破られた

さあ、私の名前を石碑に刻み、

墓の上に墓石を置いてちょうだい

あなた方の母¹⁸⁾

物語の最終場面では、カセットに録音されたナワルの独白が流される。激しさをます降りしきる雨の音だけが聞こえる沈黙のなかに、すべてから解放されて、亡き恋人ワハブの待つ彼方に、「大海の底より、もっと深くに／幸福の涙でできた大海のただなかに」¹⁹⁾ 回帰せんとするナワルの震える声が厳かに響く。

IV 沈黙のおくに秘められた真実

探しつづけた最愛の息子は、戦争の過酷な運命のもと、母の愛と幼年を奪われ、冷酷な兵士であり拷問人となっていた。ナワル自身も戦争に翻弄され監獄に捕えられる。こうして母と息子は互いにそうとは知らず巡り合い、息子は母を姦淫し母は息子の子供を身ごもる。最後に読み上げられるナワルの手紙からは、女性として、母として、この耐え難く痛ましい現実を全身全霊で受けとめ、許し、昇華せんとする一途な思いが立ちのぼり胸を打つ。

『炎：焼け焦げる魂』の物語が、ギリシア悲劇の『オイディプス王』にインスピレーションを得ていることは明らかだろう。あまりにも有名な神話に基づく悲劇の王オイディプスは、そうとは知らず実の父を殺し、実の母と交わって子供をもうける。人間の条件を反転させたかのような極限の不条理のうちに、人間の隠された欲望がえぐりだされた悲劇は、戦争においては決して非現実的なものではなく日常的なものですらあるのかもしれない。百年もつづく内戦において、敵と味方の区別がつかなくなるほど混乱し、憎しみの連鎖のなかで肉親同士さえ否応なく引き裂かれていく。

ムアワッドの戯曲は、そうした過酷な状況を告発し戦禍の悲惨さを訴えかけると同時に、そこからは、内戦を引き起こし今日に至るまで戦争を終息させえない先人たちへの強い怒りが湧きあがる。『沿岸：頼むから静かに死んでくれ』において、親殺しを犯したアメは言い放つ。

(…) あんただから言うけど、敵、それは、親たちだ！(…)

親の腹を引き裂き、体を太陽の下に放り出して腐らせよ (…)

奴らがやった悪事は、人殺しよりひどい。俺たちからかけがえのないものを

取り上げた。若者の未来を、大事な奇跡を殺した。遊び友達を取り上げ、

その記念に、ボロボロの頭蓋骨を墓の冠とした(…) ²⁰⁾

一方、『炎：焼け焦げる魂』においても、さまざまな表現で、内戦に明け暮れてきた同胞たちは糾弾される。「兄弟が敵対し、姉妹が憎しみ合い、市民が憎悪に身を焦が」²¹⁾ し、人々は「同じ国、同じ血を分け合いながら、互いに頭骸骨を叩き割り、靴をもぎ取る」²²⁾ のだ。

ナワルは自らも深く傷つきながら、愛する息子と生き別れた過去を、たとえ誰もどうすることも出来なかったにせよ、そのことによって息子が戦争犯罪人となってしまったことを自らの咎として責めながら、遺言で墓の碑銘には何も刻まず、墓石すらおかないよう言い残す。ナワルは内戦の悲劇をその身で一身に受けとめ、痛ましい真実を深い沈黙のなかにしまいこむ。そしてそれは「いつか見出されることによってしか明らかにならない真実」だった。

Mar. 2016

W. ムアワッドの戯曲にみるトランスナショナルな戦禍の記憶

V トランスナショナルな地平と戦禍の記憶

「見出されることによってしか明らかにならない真実」とは、どのようなものなのだろうか。おそらくここには、ムアワッドの深い信念とメッセージが宿っているように思われる。物語の構成（プロット）はまさに、双子の姉弟ジャンヌとシモンが、母の遺言に従い、母の人生の軌跡のなかに秘められた真実を探し出そうとする物語であった。

一方、注目すべきことに、ムアワッドはエッセイにおいて、この物語を構想したのはある知人の女性カメラマンの証言がきっかけであったと述べている。それによれば、その女性カメラマンが実際にレバノンの非正規軍の兵士に捕えられ性的拷問を受けた女性を取材した際、後にその女性を拷問した兵士がどこに亡命したかを調べたところ、兵士は人道上の罪を問われることもなくカナダのモントリオールにひっそりと暮らしていたという事実が判明した。ムアワッドはこの事実にはひどく驚き、遠いレバノンでの出来事が、平穏なカナダの社会のなかで関係がないと思って生きている人々とも深く関わっていることを実感したという²³⁾。すなわちムアワッドの作品とは、いわばそうしたトランスナショナルな視野のもとで戦争の不条理を問い直し、人々にその真の悲惨さと切迫感を訴えかけようとしたものではないだろうか。

泥沼の内戦に明け暮れる祖国、そこで繰り広げられている悲惨な出来事とはまさに筆舌につくしがたいものであり、当事者の深い沈黙のなかに封印されるしかないものなのかもしれない。しかし、国際社会が無関心でいることは許されない。苛烈で、残酷で、痛ましい真実である戦禍の記憶は、無関心と無知のなかに打ち捨てられているのではなく、見出され、掘り起こされ、揺り動かされることによってはじめて命を吹き込まれるのではないだろうか。

『炎：焼け焦げる魂』において、ジャンヌとシモンが真実を探りあてたのち、はじめて沈黙は破られ、ナワルの手紙から隠されていた真実の総体が明らかになる。そしてナワルの墓の碑銘には名が刻まれ墓石が置かれる。最終場、降りしきる雨のなか語られるナワルの言葉は、魂に降る雨のように戦禍に傷ついた心を癒し、荒れ果てた地上に立ちのぼる祈りのように静かに響く。

押し寄せる難民と彼らとの共存を迫られる今日の世界において、ムアワッドの突きつける問いかけはますます喫緊のものとなり重要性を増しつつあるといえるだろう。

〔付 記〕

この論考は、平成27年度の科学研究費補助金基盤研究C（課題番号26370376：「ケベック・ベルギー・スイスの仏語圏文学にみる脱周縁性とトランスナショナルな変容」）を受けての研究成果の一つである。

注

- 1) *Le Sang des Promesses*, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2009, p. 15
- 2) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 17
- 3) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 18
- 4) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 17
- 5) ギリシア神話をもとにしたホメロスの叙事詩『オデュッセイア』に因む。主人公オデュッセウスの長い帰還の旅に因み、長い苦難の旅路をしばしば「オデュッセイア」という修辞で表すが、ムアワッド自身が自らの旅にこの言葉をあてはめている。
- 6) 静岡芸術劇場での公演の様子については下記のURLを参照。
http://www.spac.or.jp/10_spring/littoral.html
- 7) 以後、*Littoral*の訳はこの講演の折に翻訳された『沿岸 頼むから静かに死んでくれ』（ワジディ・ムアワッド、山

田ひろ美訳, れんが書房新社, 2010) より引用する。

- 8) 『沿岸 頼むから静かに死んでくれ』, ワジディ・ムアワッド, 山田ひろ美訳, れんが書房新社, 2010, 63 ページ。
- 9) ムアワッド, 前掲書, 91 ページ。
- 10) ムアワッド, 前掲書, 96 ページ。
- 11) ムアワッド, 前掲書, 115 ページ。
- 12) ムアワッド, 前掲書, 147-150 ページ。
- 13) 例えば映画においては, ナワルは, モントリオールのプールサイドで偶然, レバノンの監獄で拷問人であった男と出会う。そしてその男の足の裏の見覚えのある傷跡から, ナワルは, 実は探し続けた息子が自分を苦しめた拷問人であった事実を知る。映画では, ナワルはこの後, 急に放心状態に陥り死に至る。しかし戯曲ではこのようなエピソードは一切出てこない。また映画では, キリスト教徒対イスラム教徒の対立の図式がはっきりと描かれているが, 戯曲では様々な宗派や陣営が複雑に入り乱れて対立し合っていることが連想されるだけの描かれ方となっている。
- 一方, シアタートラム (世田谷パブリックシアター) では, ムアワッドの戯曲を脚本として, 藤井慎太郎翻訳, 上村聡史演出, 麻実れい, 岡本健一その他の出演により, 『炎 アンサンディ』として上演された。
- 14) *Incendies*, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2003, p. 13-14
以後, 本書からの引用はすべて筆者自身の拙訳による。
- 15) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 14
- 16) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 85-86
- 17) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 17
- 18) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 88-90
- 19) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 92
- 20) 『沿岸 頼むから静かに死んでくれ』, ワジディ・ムアワッド, 山田ひろ美訳, れんが書房新社, 2010, 84 ページ。
- 21) *Incendies*, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2003, p. 52
- 22) Wajdi Mouawad, *Ibid.* p. 54
- 23) *Le Sang des Promesses*, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2009, p. 35

主要参考文献

Littoral, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 1999
Incendies, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2003
Forêts, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2006
Ciels, Wajdi Mouawad, Acts-sud, 2009
Le Sang des Promesses, Wajdi Mouawad, Acts-sud/Leméac, 2009
『沿岸 頼むから静かに死んでくれ』, ワジディ・ムアワッド, 山田ひろ美訳, れんが書房新社, 2010
DVD『灼熱の魂』アルバトロス(株), 2010
http://www.spac.or.jp/10_spring/littoral.html
<http://www.wajdimouawad.fr/>

(2015年11月20日掲載決定)